

様式 1

研究報告書（平成 27 年度）

提出者 辻本 登志子

提出年月日 2016 年 4 月 27 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 フィリピン人移住労働者のライフコースとグローバルなモビリティとの接合に関する研究

英文 A study of the intersections of life courses of Filipino migrant workers and their global mobility

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

これまで多くの移民研究において、ライフコースが重要な関心事となってきたが、ほとんどがホスト社会に定住し社会統合の渦中にある移民を対象としてきた。本研究は、必ずしも一箇所に定住しないフィリピン人移住労働者が、グローバルな移動の渦中のなかで、どのように労働や家族生活など一連のライフコースを形成しているのか、明らかにすることを目的とする。特に、香港・シンガポール・台湾・中東・韓国などで就労し、その後カナダへの継続的移住（onward migration）を経験したフィリピン人移住労働者に対して、研究者が過去実施したインタビューのデータを分析の対象とした。また、更新不可の短期雇用契約が主流となっている現代の移住労働環境において、「モビリティ（移動性; mobility）」に適応していくことが必須となっているが、フィリピン人移住労働者がライフコースを形成する手段として、どのようにこれを取り入れているのかについても注目した。

この研究を通して、北米やヨーロッパなど移民の主要受け入れ国を念頭において分析されてきた従来の社会統合やライフコースに関する議論を再考し、フィリピン人移住労働者が複数の場所とモビリティを通して、かれ/かの女らが望む社会統合やライフコースをどのように実現しているのか考察した。この研究は、これまで特定の地域や受け入れ国中心のパースペクティブで行われてきた移民研究から一歩出て、移住労働者とかれ/かの女らのモビリティへ分析の軸を移行させていく、パラダイム転換につながるものである。

【研究業績】 学会報告・論文など

1. Tsujimoto, Toshiko. 2016. “Qualitative Research Methods: A Discussion on Doing Research about People on the Move,” Bulwagang Filipino, College of Arts and Social Sciences, Mindanao State University Iligan Institute of Technology, Republic of the Philippines. February 13. (招聘講演)
2. Tsujimoto, Toshiko. 2016. “Pag-aaral ng Wikang Filipino sa Labas at Loob ng Pilipias:

Pangangailangan at Pakinabang nito sa Lipunang Hapon (Studying the Filipino language in/outside the Philippines: Its necessity and usefulness in Japanese society),” Ika-9 na Pambansang Kumperensiya sa Filipino (The Ninth National Conference of the Filipino Language), Mindanao State University Iligan Institute of Technology, Republic of the Philippines. February 5. (フィリピン語；プレナリー・スピーカとして招聘講演)

3. The 8th Next Generation Global Workshop (第8回次世代グローバルワークショップ)の Retirement Migration セッションにおいて、コメンテーターをつとめる (2016年8月2日、京都大学)

【成果の概要】(800字程度)

(論文の執筆と投稿)

フィリピン人移住労働者のライフコースとカナダへの継続的移住に関する論文を国際学術誌に2015年初旬投稿したものの、掲載不可の判定を受け、理論的枠組みや論文の構成をはじめから書き直す作業に今年度はかかりっきりになってしまった。もともとの理論的枠組みを解体および再構築するのに思った以上の時間と労力がかかり、非常にもどかしかったが、近年移民研究において注目されつつある、モビリティをライフコース分析の柱に据えるという理論を積極的に援用しながら論文の大幅修正を行った。結果、移住一定住一統合というように、受け入れ国中心の移民研究における分析枠組みを根本から考え直す契機となるとともに、当事者のモビリティからグローバルな移住労働を再定義するという新たな視点を獲得することができた。論文は近日中に、国際学術誌に再度投稿予定である。

この論文執筆では理論的枠組みとしてだけでなく、方法論としてもモビリティを援用したが、「移動する人びと」を質的に研究する方法論に関する報告を、フィリピン共和国ミンダナオ国立大学イリガン工科大学において行うことができた。これまで研究者が行ってきたフィリピン人移住労働者の研究を、本国の研究者と共有し、さまざまな貴重なコメントをもらえたことは、とても大きな成果となった。

(在フィリピン研究者との今後の連携について)

2016年2月初頭に、フィリピンのミンダナオ国立大学イリガン工科大学を訪れ、研究発表や学生向けに講義などを行ったが、それを契機に同校の研究者と今後、共同研究の可能性を模索していくことで合意した。フィリピンのなかでもミンダナオ島は、ひととき多くのエスニック・グループが共存する多文化・言語社会として知られているが、多文化共生をめざす日本社会にとっても、貴重な示唆を与えてくれる場所である。マニラに偏重しがちであった研究者との交流や研究活動を、ミンダナオなどの地方都市などへも多様化させ、ミンダナオと日本において、新たな協力関係や共同研究の礎をつくっていけるように努力したい。

平成 27 年度の研究活動に関する写真



[研究業績 2 のミンダナオ国立大学イリガン工科校で開催された、第 9 回全国フィリピン語会議で講演する研究者]



[ミンダナオ国立大学イリガン工科校の研究者と今後の共同研究の可能性について意見交換する研究者]